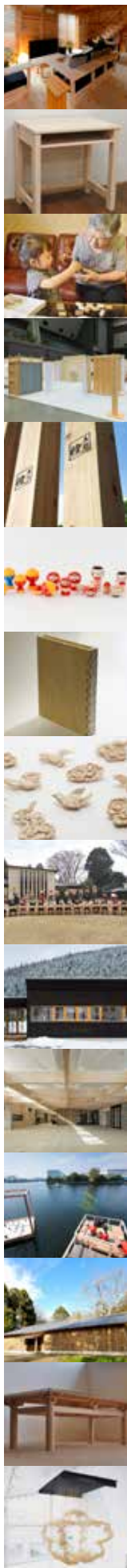


WOOD DESIGN CONCEPT BOOK 2018

ウッドデザイン コンセプトブック 2018



はじめに

このたび、「ウッドデザインコンセプトブック2018」を刊行する運びとなりました。今年度は一部形態を変更し、最優秀賞、優秀賞、奨励賞、特別賞の受賞作品の開発ストーリーを掲載しています。4回を迎えた今年は、木材の使い方に特色のある学校や施設、地域ならではのアイデアに溢れた作品、木材の活用の幅を広げる技術や素材など実に多彩な作品が受賞しています。なぜ作品を開発するに至ったのか、問題意識はどこにあったのか。さらに作品を形にするためにいかなる工夫が必要だったか、地域や異分野とどのような連携を形にしてきたのか。どのストーリーも、新たな木材利用において貴重なヒントになるものです。本誌に収録されている作品以外にも、こうした取組を実践している方々は多いと思います。林業関係者、多くの企業、組織、団体やデザイナー、クリエイター、技術者、そして地域が深く連携し、次のウッドデザイン賞を生みだして、森林の活用と保全、地域と国の活性化につながっていくことを祈念しています。

目次

※受賞作品名のみ、団体名は本文参照

4	江東区立有明西学園
6	浦和明の星女子中学・高等学校 カフェテリア棟
7	表層圧密 Gywood シリーズ
8	改質リグニンを利用した3Dプリンター用基材の開発と造形試作への展開
9	odai
10	安永寺本堂
11	「やさくれ」抑制機能木製床 ササクレス
12	いわきCLT復興公営住宅
13	デジタルファブリケーションによる自律分散型生産ネットワーク
14	全国47都道府県から森林認証材の供給体制確立
15	静岡県富士山世界遺産センター
16	a piece of forest
17	徳島県の体験型施設「TurnTable (ターンテーブル)」
18	下北の自然な家／ひのきかこ机
19	MOKULOCK・KODOMO シリーズ・OTONA シリーズ／大川 TATEGUMI
20	住宅の長期使用を実現する木質材料の接着耐久性評価に関する研究／飾りコマ
21	wood butterfly/hibori プローチ
22	自由学園男子部 80年の木の学び／下川町のトドマツオフィス
23	南三陸町役場庁舎／歌津総合支所／新木場海床プロジェクト
24	「南房総千倉CLT収納庫」プロジェクト／斗組テーブル
25	USARA
26	審査委員からのメッセージ
28	ウッドデザイン賞2018 概要
30	受賞後の展開／ウッドデザイン・サポート連絡会



圧倒的な木の質感を感じられる校舎で、多年齢の子供たちが学ぶ



明るく開放的、かつ年齢ごとにゾーニングされた「図書室」

評価ポイント

古くから木を扱う「木場」の文化を発信するシンボリックな施設でもあり、教室の床現しの柱・梁等により木の温もりを感じて学習できる。特にアクティブラーニングの実現のために工夫された仕掛けが素晴らしい。

【入手方法（連絡先）】

江東区立有明西学園

<http://ariakenishi-gakuen.koto.ed.jp/>

株式会社竹中工務店

<http://www.takenaka.co.jp/news/2016/06/01/>



栗田 献さん

回廊の先には図書館がある。天井高があり、心地よい空間に外光が注ぐ。多様な年齢の子どもたちが入り混じりながら、学ぶ場所であり、読書や勉強の空間づくりもエリアごとに工夫が施されている。太いシンボル柱には多様な樹種が貼ってある。樹種ごとに説明があり、色や堅さの違いを体感できる。子どものみならず、建築の専門家でも感心するそうだ。

「意識したことは、学校の教材化」です。広場の壁面には日本の伝統色を配し、四

季を持つ日本の良さを感じてもらおうことができます。設計にあたっては、木を用いて子どもたちへ何ができるかをデザインしました。この学び舎を卒業した子どもたちが、この学校であるからこそ感じたこと、学べたことの素晴らしさを実感して欲しいと思っています」。

木場の歴史、新たな学びの実践、木材の良さと機能、これらが三位一体となった先導例として高く評価されるにふさわしい作品である。



柔らかな曲面で子供たちを包み込む木の校舎



アクティブラーニングを誘発する「ことばの壁」

「200メートルを超える長い校舎を、一体的に一つの家として使うため、木の回廊をつくりました。そこで交流や学びのきっかけとなる仕掛けを随所に盛り込みました。構造体は耐火木造を使用していますが、できるだけ子どもたちが過ごす空間に優先して木を使いました」。

この学校で木をどう使うべきか、区主催のワークショップで関係者や専門家が集まり、議論を交わしてきた。構造体にはカラマツを耐火集成材した材を用い、内装に多様な木を適材適所で使うことにし

た。特に手に触れる、目に見える場所にできるだけ多くの木を使うよう心掛けた。あえて節を残し、木という素材の本来の良さを体感できるだけでなく、無駄なく使うことで木材の流通促進につなげた。

印象に残るのが、回廊に刻まれた「ことばの壁」である。下見板張りに焼き印で、格言や詩、記号や数字が表現された。なかには、とても難しい内容のものもある。「従来の発想だと、子ども同士が交流するためにラウンジをつくりましょう、となりがちですが、空間を作って終わりではなく、交流を生み出す装置をつくろう」と思いました。言葉の壁に書かれた内容を下級生が上級生に聞いたり、友達同士で話したりして欲しいと考えました」。

表現すべき言葉は1年かけて考えたという。日常の気づきのなかで教科書にはない学びのきっかけを提案しており、昨今、教育分野で注目されているアクティブラーニングの実践と言える取組である。

最優秀賞（農林水産大臣賞）

ライフスタイルデザイン部門 建築・空間分野

江東区立有明西学園 （東京都）

株式会社竹中工務店（東京都）、江東区（東京都）、株式会社久米設計（東京都）

江東区立有明西学園は、区内初の小中一貫9年制の公立学校である。都市部では実現が困難であった大規模な学校施設の木造化・木質化を行うとともに、豊かな教育環境を児童・生徒に提供し、教職員にも心地よく働きやすい質の高い職場を実現した。古くから木を扱う「木場」の文化を発信するシンボリックな施設でもあり、教室の床や腰壁、現しの柱・梁により木の温もりを感じて学習でき、木を大切に扱う気持ちを児童・生徒にも芽生えさせている。まさに木の文化の発信と学習環境の向上、地域産業の伝承、感性教育を見事に融合させた質の高い施設づくりで成功している点が高く評価された。

設計を担当した竹中工務店設計部8部門の栗田献さんは語る。

「臨海部の子ども増加の受け皿として、学校をつくるにあたって、区が考えたことは2つありました。ひとつは、義務教育校として、新たなプログラムを取り入れること。もうひとつは、木の学校をつくりたいということ。江東区には江戸初期から木場という地域があり、木の文化が培われ、木材の貯木場の歴史がありました。こうした木材流通産業の歴史を継承する木の学校をつくりたいということでした」。

た。特に手に触れる、目に見える場所にできるだけ多くの木を使うよう心掛けた。あえて節を残し、木という素材の本来の良さを体感できるだけでなく、無駄なく使うことで木材の流通促進につなげた。



日本の伝統色を配した象徴的な「ひろば」



杉のメリットそのままに、表層圧密で多用途に対応できるようになった

優秀賞(林野庁長官賞)

ライフスタイルデザイン部門 建材・部材分野

表層圧密Gywoodシリーズ

ナイス株式会社(神奈川県)

表層圧密テクノロジーとは
軟らかい針葉樹の表層を
ギュッと圧密すること
Gywood
無垢の可能性が広がる新素材、誕生

Gywoodは杉など軟らかいとされる針葉樹の表層部を特に高密度化することで、素材の硬さや強度を向上させ、更に一般的な無垢材と比べ形状安定性を高めることに成功した無垢の新素材である。内外装材や家具等に製品展開し、人の手に触れるところ、目に見える場所に使うことで心地いい木質空間を創出する。ナイス株式会社資材事業本部木材事業部長の青木良篤さんは本製品の開発の契機をこう話す。

「杉は国内でも豊富な資源ながら、表面の柔らかさが活用の幅を制限してきた経緯があります。圧密の技術は昔からありますが、表面のみを圧密化することで杉の良さである軽さ、木目の美しさ、温かさや衝撃吸収性を活かしながら、傷つきやすさを払拭することを考えました。全国には杉の大径材が増えており、70〜80年のといった本来価値のある杉を活かすことができていないのが現状です。弊社は木材流通業としてそれを使っていたかのように常に考えています」。

一般的に木の熱伝導率は密度が高くなる。とそれに比例してあがり、熱が奪われやすくなる。フローリングが冬に冷たく感じるのはこのためだ。表面圧密であれば、熱伝導率はそれほど上がらず、常に温かく感じる。さらに形状安定性が向上したことで、これまでは難しいとされていた幅広で薄い板材への対応を可能とし、内外装木質化・家具等への可能性を大きく広げた。美しい木目の意匠や焼成、拭き漆、藍染など種々の技術との融合で付加価値の高い製品展開も可能だ。幅広板材は大径化した針葉樹から生み出される。今後増える大径材の用途開発に大きく寄与する素材であり、その利用を通じて森林資源の循環に貢献することができると。

「地域の製材所が減り、木材に関わる人材も減っているなかで、この技術によって地域材の需要を増やし、地域の木のプロが育つことを願っています。杉は日本人の記憶に最も刻まれた木。その杉をどんどん使って欲しいと思っています」。

主に杉を使用することで、全国各地の地域ブランド材や森林認証材の活用に対応が可能だ。本製品の生産・流通を通じて、地域で大切に育ててきた木が付加価値をもって製品化され、地産地消はもちろん地産外消、さらには海外で利用される仕組みを構築すること、各林業地のモチベーションを高め、森林環境の健全化を図っていく。

「素材を供給する山側関係者の方からは、付加価値をつけ、無垢材・大径材を上手に製品化している点を非常に評価していただいています。家具メーカーの方からは4mの長尺材の幅広板は迫力があるとの声もいただい

評価ポイント

杉の軽さや温もり、衝撃吸収性などのメリットはそのままに表面のみを硬くして用途を各段に広げた。内外装材や家具での活用が期待され、実際に触って使ってこそ、その良さを実感できる。針葉樹の利用価値を広げる素材である。

【仕様・価格】

840mm×1,900mm×700mm/30,000g/152,000円

【入手方法(連絡先)】

ナイス株式会社 <http://www.nice.co.jp>
Gywood <https://gywood-muku.jp/>



フローリングとテーブルの使用例



青木良篤さん

ています。最近では広葉樹の資源も乏しくなっているのが、広葉樹の代替としても利用できればよいと思っています」。

これまで木はそのまま使うのがよいと思われてきた。それが永く続き、別の素材に置き換わってしまった。その中間に位置する新たな木材開発として本技術は非常に魅力的だ。新たな素材はデザインのアイデアをも喚起させる。素材の料理人、つまりデザイナーや加工業者、工務店などがこの素材とどう向き合うかが楽しみである。



木架構のアーチが印象的な軽やかで柔らかな建物



ここへ帰ってきたい、と思えるような場所を、という思いから生まれた空間

「勉強を離れリラックスするカフェテリアは、教室とは雰囲気が大きく変える必要があると考え、曲線を描く柔らかな内部空間を計画しました。空間を軽やかなスケール感と暖かな素材感で構成するため、木架構を選択しました。これにより、12mスパンの多目的に使える大空間を実現しています。柱、梁、方杖には施工性と経済性に配慮し幅105mmの一般流通材を使い、プレカット加工可能な仕口と既製金物で接合し、その両面に構造用MDFを釘留めして、123mm厚の軽やかなアーチ架構を実現しました」。

学園の伝統色である赤系の色を外装に使用し、新たなシンボルとしての存在を際立たせた。さらに、学び舎である校舎から木造のカフェテリア棟は渡り廊下でつながっている。多感な時期を過ごす場所が木に囲まれた素晴らしい空間であることが、ここで学校生活を送ったことを長く記憶に刻み込んでくれるであろう。

優秀賞(林野庁長官賞)

ライフスタイルデザイン部門 建築・空間分野

浦和明の星女子中学・高等学校 カフェテリア棟(埼玉県)

学校法人明の星学園(埼玉県)、清水建設株式会社(東京都)

浦和明の星女子中学・高等学校は、聖母被昇天修道会(本部カナダ)が母体となり、女子教育を担う学校として昭和42年に開校した。設計、建築に携わった清水建設設計本部の加地則之さんは語る。

「このカフェテリア棟は、これまでの卒業生や、これから巣立つ生徒が、ここに帰ってきたと思える場所にしたい」という学校様の思いを受けて計画を始めました。女子教育の場としての柔らかい空間と、華美ではない、普通の建物希望されました。また、動線空間であっても、人の出会いを生む、教育の場、としたいということも考えになられていました。これに対して我々は、簡素で合理的な木架構のアーチを提案し、この

案を受け入れていただきました。結果、ご希望を超えた建物ができたと大変喜んで頂いています。何より、新しいカフェテリアを初めて見た生徒さん達が、歓声を上げながら大喜びしてくれています」。

『みんなのイエ』をコンセプトに設計されたカフェテリア棟は、女性教育の場にふさわしい軽やかで柔らかな空間を木造在来軸組と構造用面材で構成した木質アーチ架構により実現している。このアーチの構造用面材には、その簡素な素材感に着目し、「構造用MDFの現し仕上げ」を採用した。思い描いた空間を実現するため、木材利用に對しても、さまざまな工夫を凝らした。

評価ポイント

美しいアーチが印象的な開放的なカフェテリアである。多感な時期を過ごす場所が木に囲まれた素晴らしい空間であることが、ここで学校生活を送ったことを長く記憶に刻み込んでくれるであろう。

【閲覧先または連絡先】

浦和明の星女子中学・高等学校
<http://www.urawa-akenohoshi.ed.jp/>
清水建設株式会社
<https://www.shimz.co.jp/>



加地則之さん



外装は学校を象徴する赤系、校舎からは渡り廊下でつながる



地域の多様な樹種を活用したアロマ雑貨等の商品群「odai」

「森林資源に対するユーザーの用途やニーズは、多様化しています。従って、森づくりも多様化が求められており、林業を進展させる為には森林所有者に対して多様な林業を提案する能力が必要です。これまでの林業は限られた樹種によって行われ、収穫まで50年以上かかっていました。それをどう克服していくか。先人が作って下さった貴重な人工林資源を有効的に活用させて頂き、その後の山をど

優秀賞(林野庁長官賞)

ハートフルデザイン部門 木製品分野

odai

宮川森林組合(三重県)



改質リグニンと生分解性材料を組み合わせた3Dプリンター用基材と造形物

改質リグニンは(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所にて開発され、国内のスギ資源から製造される新たな工業用樹脂素材であり、国産資源の利活用を可能とする。加工性が高く、熱に強いという優れた性能を持ち、様々な製品の素材として利用できることから高付加価値製品への用途展開が可能だ(「SIPリグニン」のホームページ下段参照)。

また、製造は中山間地域で製造できるよう安定性に配慮されており、世界初の改質リグニン製造に特化したシステムで、現在ベンチプラントで実証中である。改質リグニンを利用した高付加価値製品の登場により、「改質リグニン産業」という新市場の創出につながり、改質リグニンビジネスによる地方創生に貢献する。

今回の受賞作品は、改質リグニンと生分解性材料を組み合わせた新たな環境調和型3

優秀賞(林野庁長官賞)

ライフスタイルデザイン部門 技術・研究分野

改質リグニンを利用した3Dプリンター用基材の開発と造形試作への展開

ネオマテリア株式会社(京都府)、京都工芸繊維大学(京都府)

木材にはリグニンという成分が2〜3割ほど含まれている。リグニンは、木の細胞や細胞壁を結合させ、木材の強靱さを生み出す天然の高分子化合物であり、高い強度や耐熱性を示す優れた素材であることが知られている。内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)「次世代農林水産業創造技術」の「地域のリグニン資源が先導するバイオマス利用システムの技術革新」において産学官の28機関による研究コンソーシアム「地域リグニン資源システム共同研究機関(SIPリグニン)」が結成され、リグニンの新たな用途開発の研究が進められており、本作品もその成果のひとつである。

改質リグニンは(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所にて開発され、国内のスギ資源から製造される新たな工業用樹脂素材であり、国産資源の利活用を可能とする。

加工性が高く、熱に強いという優れた性能を持ち、様々な製品の素材として利用できることから高付加価値製品への用途展開が可能だ(「SIPリグニン」のホームページ下段参照)。

また、製造は中山間地域で製造できるよう安定性に配慮されており、世界初の改質リグニン製造に特化したシステムで、現在ベンチプラントで実証中である。改質リグニンを利用した高付加価値製品の登場により、「改質リグニン産業」という新市場の創出につながり、改質リグニンビジネスによる地方創生に貢献する。

今回の受賞作品は、改質リグニンと生分解性材料を組み合わせた新たな環境調和型3

う使うかが課題です。森づくりの多様性は商品の多様性から林業の多様性につながっていくと思っています。

「odai」から得られる収益は可能な限り大台町に還元し、原料は地域内の森林所有者から直接買い取る。森づくりに使用する広葉樹の苗木は、町内の公募で集まった人々で大台町苗木生産協議会を組織し、地域性苗木と呼ばれる苗木を13名で作製、購入する。町内の自生種から種子を採取し、鉢上げ等の育苗の過程を全て記録する事により、トレーサビリティが担保された苗木の生産・販売となり、地域生態系の保全等の環境的機能の維持に寄与しつつ、地域経済にも貢献する。現在は約130種、4万本の地域性苗木の生産を行う。

多くのアロマ商品が海外の植物を原料とするのに対し、「odai」は、地域に生育する樹木のみを使用しており、自然性の高さからアロマ業界では最高品質とされる「ワイルドグレード」の評価を得ている。また、トレーサビリティの高さも連携企業からの信頼につながっているという。

「宮川森林組合がある地域は紀伊半島に位置していますが、その森には何百種類もの木があり、それには意味があります。環境に応じた多様な樹木を組み合わせる事で付加価値が得られるメイドインジャパンの森づくりや林業に発展させる事が必要です。それぞれの木と向き合い、その特徴を知る事で、新しい森林資源の活用方法を知り、立地環境に応じた樹木を組み合わせて森を作れば、生産コストが安価になります。また、多様な樹木や部位を使用する事で、3〜5年のスパンで収入を得るチャンスがあると考えています。その開



改質リグニンの3Dプリンター基材開発の展開チャート

Dプリンター用材料を開発、デザインや作用基材としていくことで木質バイオマスの新たな需要創出を可能としたものだ。この技術により、廃棄されている木質バイオマスを用いた3Dプリンター用樹脂材料への応用展開も可能となり、生産に関わる新たなサプライチェーンを構築していくことで、木質バイオマスを利用した3Dプリンター分野における新産業の創出に貢献できる。

同社では、3Dプリンター用フィラメントの試作品を用いた3Dプリンター造形による造形品の普及活動を展示会や講演会にて行っている。また、SIPリグニンのコンソーシアム機関と連携し、展示会等で一般消費者や3Dプリンターユーザーに向けた新たな3Dプリンター材料としての利用とその可能性についてアピールも実施している。

「展示会を通じて、3Dプリンターユーザーの方々から、新たな材料として期待しており、使用してみたいという声や、杉由来の新

評価ポイント

五感に訴える木由来の商品開発の視点は独創性がある。森林組合が新たなビジネスモデルを生み出し提案するとともに、デザインを通じて地域材の良さを広めようとする先進的な取組。

【仕様・価格】

(エッセンシャルオイル 5ml) 30mm×30mm×65mm/33g/7,550円

【入手方法(連絡先)】

宮川森林組合オンラインショップ
http://www.odaimori.com/



生活空間に森の香りを届ける



岡本宏之さん

発のひとつが香りの活用です。都会の生活空間の衣食住に多様な森の香りを取り入れてもらうことです。複数の木の香りを組み合わせる事で大台町の森を感じて頂けます。化粧品など多様な業態に対して提供できる点もポイントです。林業の主流は建材生産でありつつも、多種多様な商品開発、人材の多様化も必要です。国内だけではなく、ニーズは海外にもあると考えています。もうひとつの車輪を育て拡大し、林業のイノベーションにつなげていきたいです」。

業界との議論のみならず、多様な産業、他国ともディスカッションしながら新しい林業のありかたを模索していくこと、それこそが地域林業の未来を拓くに違いない。

評価ポイント

木質バイオマスの新たなマテリアル利用の需要創出が可能となる技術で今後の展開に期待したい。次世代ものづくりの技術として注目される3Dプリンタに木の素材活用を組み合わせた、「異業種協業」の見事な事例である。

【閲覧・入手・技術提供の方法】

SIPリグニンのホームページや展示会出展物にて閲覧可能

http://lignin.ffpri.affrc.go.jp/

規材料であることから林業活性化に向けて普及させてほしい、という声をいただいています。また、現在利用されている3Dプリンター用材料に比べて、開発した改質リグニン材料の造形物は、木の香りが残っており、積層が木の風合いに似た模様も造形しやすいという感想もあります。教育関係の方からは、3Dプリンターが教育場面で活用されつつあり、子供向けの教育においても使用したいというお話もありました(株式会社ネオマテリア)。

今後は、新たな森林からの恵みとして、林地残材の活用による機能性を付与した改質リグニンの製造、加工、機能化、最終製品化、副産物利用などが期待できる。林業地域に収益をもたらすリグニン産業というビジネス基盤の確立に期待したい。



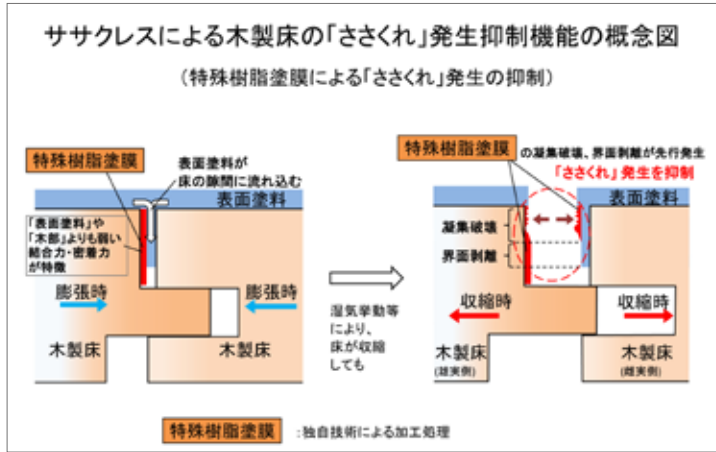
「ササクレ」を施工した体育館の床

優秀賞(林野庁長官賞)

ハートフルデザイン部門 建材・部材分野

「ささくれ」抑制機能木製床 ササクレス

空知単板工業株式会社(北海道)



本製品は、体育館や武道場等の屋内運動施設にて使用される木製床。近年体育館では、木製床の「ささくれ」が発端となり、複合要因による木製床破壊後、破片で競技者が怪我に至る事故が発生している。本製品は独自の「特殊樹脂塗膜」により、事故発端となる「ささくれ」発生を大幅に抑制する機能を有している。開発者の吉岡昌志さんはこう語る。

「開発のきっかけは、体育館木製床の破片による事故の続発、メディア報道に影響された木製床への不信感、さらには、木製床を敬遠した樹脂製床採用という市場反応など、体育館から木製床が淘汰されるのでは、という危機感でした。事故発端の「ささくれ」発生防止のため、床側面に塗料を弾く『界面剥離』の効果付与を模索しました。一般的な離型剤から特殊用途の樹脂、ときにはプリン等の食品に至るまで、あらゆる物質による処理を試しました。」

ささくれの発生原因は複合的なものによるが、おおよそは以下のプロセスにある。木製床の施工時に行う現場塗装では、隣り合う木製床の隙間に流れ込む表面塗料が硬化して床同士を接着する場合がある。ところが、施設の使用環境や木材の吸湿膨張や乾燥収縮といった特性で床が収縮する際に、表面塗料の結合力よりも弱い木部の箇所があると、小さな木部破断が起こる。これが、ささくれである。はじめは小さなものでも、競技中の衝撃やウェアが引っ掛かるなどの状況が重なると部分破壊を起こして、それが破片になり、身体を傷つけるのである。この問題に対し、同社は独自技術により以下のような対策を考えた。

「床側面処理による効果は、当初目指した床の隙間に流れ込む塗料を弾く界面剥離のほか、処理する樹脂層自体が木部よりも弱い力で凝集破壊することにも視点を拡大しました。同時に別な不具合が生じないような安全性等にも留意しました。約5年の鋭意研究の末、これら機能を併せ持つ『特殊樹脂塗膜』を開発しました。外的要因等により木製床が収縮しても、床に附属する部分が木部より先行破壊することで「ささくれ」を抑制する、今までにない新機能を付与できました。」

ささくれという、誰もが知りながら、製品開発ではなかなか目を向けなかった課題の解決に取り組んだ点は高く評価できる。折

評価ポイント

屋内スポーツを安全に楽しむための、技術による工夫がよい。ささくれという、誰もが知りながら、製品開発ではなかなか目を向けなかった課題の解決に取り組んだ点は高く評価できる。

【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】
135mm×1,800mm×18mm/2,500g/
問い合わせ/空知単板工業 砂川工場
0125-54-4330
<http://www.sorachitanpan.com>



吉岡昌志さん

しも2020年の東京オリンピック・パラリンピックへ向けて、幅広い層がスポーツへ関心に向けている。こうした背景からも、運動環境に影響を及ぼす「ささくれ」の発生を大幅に抑制する機能を有し、安全性を高め運動に集中できる環境づくりをもたらし、社会性に意義ある取組であると言える。



伝統建築の様式とCLTという新建材の見事な融合



屋根のみが浮いているようなシンプルで美しい造形

「人と人とのつながりが希薄になっている現代において、地域の拠り所になるお寺をつくりたいと思い、安永寺を建立致しました。」

安永寺の菅生住職はこう語る。

「人とお寺のつながりが希薄になっている現代において、地域の拠り所になるお寺をつくりたいと思い、安永寺を建立致しました。」

本堂の屋根構造が出来上がった段階で「CLT施工現場見学会」を実施し、一般客のみならず木材・建築業界関係者などプロ向けの見学会も行うことで、CLTの認知度アップとCLT建築ニーズの掘り起こしも図った。建築主もいち早くホームページを開設し、自身の思いとともにお寺を紹介しつつ、地域のユーザーへの認知度向上を図っている。安永寺の菅生住職はこう語る。

評価ポイント

静謐な空間でありつつも、どこかに温かみを感じるような木の質感に包まれた寺院である。CLTの可能性を拓く、伝統建築と現代技術の高度な融合の見本例と言える。

【入手方法(連絡先)】
菊池建設株式会社
<https://www.kikuchi-kensetsu.co.jp/>



福山弘さん

優秀賞(林野庁長官賞)

ハートフルデザイン部門 建築・空間分野

安永寺本堂(埼玉県)

大光山安永寺(埼玉県)、福山弘構造デザイン(神奈川県)、菊池建設株式会社(神奈川県)

埼玉県狭山市にある安永寺本堂は、「寺院本来の姿に立ち返って、様々な人の拠り所となる場としての寺院を今一度提供したい」という若い住職の意識に鑑みて、寺院の建築様式性を見直し、原初的なかたちとしての東屋のように屋根のみが浮いたシンプルな造形を、CLT大版による3次元面トラス架構と垂木の組合せを用いて表現した建物である。

伝統建築物であり体系化された建築様式・意匠が不可欠と思われる寺院本堂を、既成の概念にとらわれずに寺院の建築様式性を見直した。CLTは軒桁・軒垂木・内部天井そして上部円形垂木架構を支えるスラストリングとしての役割を担っている。昼間は巻

き込む太陽光、夜間は壁上端などに仕込んだ照明によって、内部天井から軒天井を構成するCLT面それ自身が光っているかのように見える「光のお堂」として計画した。寺社建築のひとつの本質を光に関する水平性・等方性にあると考え、本堂外周上を均質に開口し、光が入り込むことにより屋根のみが浮き上がるような印象を作った。設計にあたった福山弘構造デザインの福山弘さんはそのこだわりをこう話す。

「シンプルな造形を実現するためにディテールには様々な配慮をしています。サッシ枠に見えるような細いフラットバーは屋根を支える小柱であり、コーナーでは四周に回るガラス部の高さ分の曲げを負担する鉄骨柱にガラスを納めながら木で被覆しました。円形配置の垂木中央の小さな圧縮リングは排気塔であり、RC壁頂部のプレート鋼板曲げ材の水切りは壁の臥梁およびガラス受けとして、CLT先端の軒樋はスラストリングを完成させるテンションラインとして機能しています。」

外観は現代的な佇まいでありながら、一歩入ると木の温もりに溢れ、お寺でありながらも居心地の良さが感じられます。訪れた方からは本堂の美しさに感動するお声はもろろん『お寺の概念が変わった』『お寺のイメージが明るくなった』などありがたいお声を頂戴しております。これから来られる多くの方に、新しいお寺のカタチとして安永寺を知っていただきたいと思っています。」

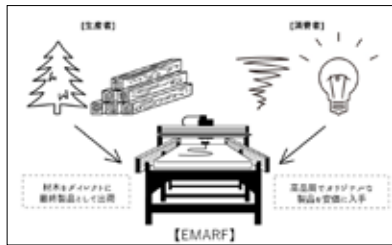
まさに、木造伝統工法と新技術・建材の高度な融合を図った、良質かつチャレンジングな事例と言える。日本らしさ、日本文化を感じさせる意匠に木材利用の新たな息吹を吹き込んでいる。



地域の材で自分だけのデザインのものづくりを実現する



笹塚駅前のベンチはワークショップで出来上がったもの



Shopbotで生産者と消費者を直接つなぐ

優秀賞(林野庁長官賞)

ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野

デジタルファブリケーションによる自律分散型生産ネットワーク

VUILD株式会社(神奈川県)



CLT構造躯体を用いた国内最大級の共同住宅

優秀賞(林野庁長官賞)

ソーシャルデザイン部門 建築・空間分野

いわきCLT復興公営住宅(福島県)

福島県土木部建築住宅課、ふくしまCLT木造建築研究会(木あみ)設計共同企業体、(株)白井設計、(株)邑建築事務所(上記、福島県)、(株)日本システム設計(東京都)、会津土建(株)、(株)渡辺組・菅野建設(株)、山木工業㈱特定建設工事共同企業体(福島県)



片面あわわして木の温もりを感じる室内

いわきCLT復興公営住宅は、CLT構造躯体を採用した建築物では国内最大級の共同住宅である。一面の居室仕上げをCLTあらわしとし、木の持つ癒し効果や調湿性、調湿性を最大限に活かした。さらに、CLTの高い剛性を活かした奥行きのある広いテラスや、外部の化粧材にも木の温かみを感じる景観形成を持ち、CLT活用の王道スタンダードモデルとして高く評価された。建築に携わった会津土建株式会社の菅家洋一社長はこう語る。

「CLTの大規模建築を実践するにあたり、国内に参考事例がないため、全てがゼロからのスタートとなりました。工期は110日間、そのうち建て方期間を26日に設定し、4700㎡の共同住宅を建てるという難題でしたが、福島県内のゼネコンと設計会社、そして構造設計会社と芝浦工業大学を迎え、共同でデザインビルドにチャレンジしました。木材総使用量は2900㎡、うち

CLTは2300㎡を使用しました。立木換算すると杉材12000本に相当するボリュームです。私達の地元、会津若松は過疎化、少子高齢化のため人口が減っています。日本の森林資源を活用し、地方創生を実現するモデルを実現したかったのです」。

建設産業は、施工現場の出入不足に対応するために、いかに施工効率を上げるかが焦点となっている。CLTは耐震性や耐火性能に優れた良質な建材というメリットに加え、大判のパネルによるシンプルでスピーディーな施工が可能となった。CLT自体の単価が高くても、工期が短くなれば全体のコストは抑えられることになる。さらに、国産材を大量に使用することにより、森林資源の循環利用を進められ、林業の成長や、地域の活性化に寄与することができる、と考えた。

「住む方がどのような住宅に住めば幸せになるか、を最優先にイメージし、CLTを融合させたユニバーサルデザインで設計を行いました。居住者の方々からは、快適で素晴らしい、電気代が2〜3割減った、遮音性が高いなど、喜びの声をいただいております。福島県産材も利用しましたが、これからの建設業界は人と環境に優しいエコロジ的な建物を提案していかなければなりません。それは未来の子供達のために、街のために、他なりません」。

今回のプロジェクトは、木材の需要拡大に繋がる新たな新産業推進モデルとして、建設業界のみならず社会に貢献する役割が大きい。CLTが魅力的な建材という話に留まるのではなく、地方創生や森の循環としてこのプロジェクトはあります。例えば、富山の南砺市では、仕事で用いる反物を収納する棚のデザインをしたと思った方が、北斗七星や天の川をモチーフにした棚をつくりました。木工職人ではなくても、2日間アイデアが形になることは素晴らしいことです」。

Shopbotを活用した自律分散型生産システムは、小規模事業者の六次産業化を推進し、地域材に付加価値をつけ最終製品までの製造が地域内で完結することを可能にする。さらに生産リードタイムの大幅な短縮や生産で発生する無駄な流通コストを削減することができ。VUILDのようなデジタル製造技術をもつ事業者との繋がりや地域パートナー連携によるデザインデータ共有で林産業にシェアリングエコノミーの価値が出てきたことも見逃せない。

「個別の特注金物はできないので、すべて本組みで組み立てられる点が特徴です。現在、Shopbotは35台(2019年2月現在)が全国にあります。各地域に分散して入ることでも物流コストを下げ、付加価値をつけていく。小さい距離感でつくることをモットーとしています。IoTのようにデジタル加工機が全国に配置され、ネットワークを介してデザインデータを受信し、地域で生産できるようになります。造作材やちょっとしたフローリング加工など、地元材をデザインしてエンドユーザーに直接提供できる仕組みです。今後の展開としては、各地域でデザイナーを雇ったり、データを作るなどの作業は大変ですので、EMARF(2019年4月リリース予定)というWEBアプリ

た視点まで広がり、街や地域全体での暮らし方といった広い視野にまで及んでいる。評価すべき点は、地域に戦略的な協業のネットワークをつくっていること、そして、価値の連鎖を創造するビジネスモデルを築いているという点である。



施工効率と住みやすさを両立させるチャレンジだった

評価ポイント

CLTを要所に使いつつ、空間全体としてのまとまり感がよく圧迫感もない。健康維持効果も見据えた、住宅におけるCLTの使われ方のスタンダードモデルとして高く評価できる。

【入手方法(連絡先)】

会津土建株式会社

<http://adoken.co.jp/>



菅家洋一さん

評価ポイント

地域の木材を用い最小限の輸送距離で、高品質で付加価値の高い製品を自分たちの手でつくることのできる先進的な仕組みだ。IoT時代の、地域ごとの森林資源活用と技術習得、人材育成を同時に満たす事例として新規性がある。

【費用・参加費・入場料など】

各地域パートナーへのShopbotの導入費用500万円に加え、デザインから製作まで実施できる自律分散型システム導入費100~500万円(1拠点)【体験・入手方法(連絡先)】VUILD 本社 神奈川県川崎市川崎区日進町3-4 unico1F-A HP:vuild.co.jp



秋吉浩気さん

を活用することでもものづくりの敷居を下げることと考えています。例えば、高齢者が求めるサイズや、自分の身体にあった特注のものなどを、一般製品と同コスト、同時期でできるようにしたいと思っています」。

プロジェクトでは、渋谷区の笹塚駅前広場の改修も実施した。プロセスとしては市民と一緒に、町内会とワークショップを実施し、多摩産材を使いながら京王電鉄と参加型のプログラムにした。

いま、SLOC(サステナブル、ローカル、オープン、コネクト)がものづくりのキーワードとなってきた。スマート林業人材の育成、未来の林業人材の育成にもつながる本プロジェクトが今後の地域材と地域人材の活用につながっていくだろう。



木格子の曲線美は思わず写真に収めたくなる素晴らしい



繊細かつ高度な加工は、木材利用の可能性を広げる

特別賞（木のおもてなし賞）

ソーシャルデザイン部門 建築・空間分野

静岡県富士山世界遺産センター（静岡県）

静岡県富士山世界遺産センター（静岡県）、坂茂建築設計（東京都）、佐藤工業・若杉組特定建設工事共同事業体（愛知県ほか）、Arup（東京都）、株式会社シェルター（山形県）

静岡県富士山世界遺産センターは、富士山の自然や歴史、文化などを後世に守り伝えていくための拠点施設である。設計は建築家の坂茂氏、美しい木格子の外観が印象的な建物だ。この木格子の施工に携わった株式会社シェルター常務取締役、安達広幸さんは語る。

「富士山は、信仰の対象と芸術の源泉として2013年に世界文化遺産に登録されました。本施設は『永く守る』、『楽しく伝える』、『広く交わる』、『深く究める』をコンセプトに、富士山の価値を探索し、伝承・交流するための施設として設立されました。目指したのは写真に撮りたいと思うような、いわゆる『インスタ映え』する日本的でクールなデザイン。SNSで情報が拡散され、個人旅行者の需要を開拓しています。近くにある徳川家康が造営した富士山本宮浅間大社とタイアップしてツアーにも組み込み、誘客もしています。全体の1割が海外の方で、特にアジアからが多いのですが、最近は欧州からの来訪も多いようです。館内は富士登山の疑似体験ができる193mのらせんスロープ

になっており、スタッフの方も英語、韓国語、中国語に対応可能です。30万人を年間目標としていましたが、開館323日で50万人を達成しました。

木格子は、曲率やひねり、長さが異なる6973ピース（ガイド材を含めると約8000ピース）の部材数、丸太に換算すると実に4300本の木材で構築されており、相じやくりを基本として一材で編み込んだような高次元の表現力を醸し出している。木材を「削り出す」ことによって、従来は困難であった曲線・ひねり形状の加工や、角度や曲率の異なる複数の部材を効率的に製作することが可能となった。技術の実用化に寄与した三次元加工機は日本で初めて導入された最新鋭のもので、設計・加工アプリケーションソフトは3Dモデリングソフト、加工データ製作ソフトを導入・開発した。これらの新技術は「新たな木造建築のデザイン」を創出し、無機質な都市型建築物を再構築できる可能性を秘めている。安達さんは言う。

「逆さ富士の底部は直径約11メートルの正円、そこから13メートルあがった最上部は45メートルの楕円形で、とても高度な加工技術が必要です。木という素材の長所に、軽さと加工しやすさがありますが、このデザインはそれをよく表現していて、新しい木の使い方が提案出来たのではないかと思います。外国人観光客はすぐそばの浅間大社の鳥居と本施設を一緒に写真に収めるそうです。近代的な建物と伝統的な建物の調和が魅力的に映るそうですね。木格子は経年変化でグレーのような色合いになると思いますが、それも楽しみの一つです」

評価ポイント

富士市と富士宮市の地域材「FUJI HINOKI MADE」を使用し、木材の削り出しによって複雑な曲線やひねり形状を有する逆さ富士型の木格子が美しい。施設内部のスロープには四季折々の映像が投影され富士登山を疑似体験できるなど、日本を代表する富士山を満喫できる施設である。

【入手方法（連絡先）】

静岡県富士山世界遺産センター
<https://mtfuji-whc.jp/>



安達広幸さん

本施設は富士市・富士宮市で育った地域ブランド材「FUJI HINOKI MADE（フジヒノキメイド）」を100％使用し、適切な森林管理、加工、流通の下で産出された木材であることが証明され、国内で初めて「SGEC（PEFC COC プロジェクト認証）」の認定を受けている。

「ほとんどの来館者が写真を撮り、触れたり、木の香りを嗅いだりして楽しんでます。館内3階から見下ろすと、ひねり形状の部材で表現された、らせん状の木格子がはっきりと確認できるため、来館者の関心度も高く、多くの方が足を止めています。意匠性の高い木格子はセンターへの来館の動機付けや満足度の向上に効果があると思われます」と施設担当者も語る。



各地域の森林認証材の活用を後押しする社会提案性の高い取組



各地域の森林認証材

「都道府県ごとに木材された認証材の丸太は、出材エリアからより近いCOC認証を持った製材工場加工できるよう、COC認証を持った製材工場のネットワークを構築しています。また、COC認証を持った工場を持たない都道府県でも隣県の製材工場などと連携でき、効率化を図っています。また、プレカット加工や防腐加工においても同様の連携を行い、認証材に対する多様なご要望に対応できる体制を構築しました。」

SDGs達成への貢献や木材のトレーサビリティが重視されるなか、地域の認証材調

評価ポイント

原木の調達～加工までなるべく地域内で行うことにより省力化を実現するとともに、全国の特徴ある認証材を活用した大型物件などにも対応できる。新国立競技場における各地域の木の利用に貢献した社会提案性の高い取組である。

【連絡先】

ナイス株式会社 木構造事業部
045-505-5402



高橋伸明さん

優秀賞（林野庁長官賞）

ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野

全国47都道府県から森林認証材の供給体制確立

ナイス株式会社（神奈川県）

新国立競技場整備事業におけるスタジアム外周部の軒と庇に、47都道府県の木材が使用されることになった。木材の活用とそれがもたらす意匠性が印象的なスタジアムにおいて、重要な「顔」である。

設計を担当する建築家の隈研吾氏は、「全国の人々が心をとつにするために考えた」とその思いを語っている。新聞記事で読まれた方も多いと思うが、軒と庇はスタジアムをぐらりと囲むように、この場所から見てもその木材の産地がある方向に配置される。北海道や東北地方は北、近畿や九州地方は西、といった形である。

における行政担当者や素材生産業者、森林組合などに働きかけ、森林認証の取得を促進し、全ての都道府県から森林認証材の調達ルートを確立した。このことにより、全ての都道府県において地域材を活用した住宅、非住宅物件への森林認証材の供給が可能となった。また、すべての都道府県地域材に認証材という付加価値をつけることができるため、公共建築物等への利用が促進され、地産地消が進むとともに、全国の特徴ある認証材を集荷し、都市部などの消費地の木構造や非住宅の木質化にも活用が可能になる。都市部で認証材を使った中大規模の建築物に採用されることで、持続可能性へのアプローチや、消費者の認証材への認知を向上させることも狙っている。

達のルートを拓いた点は社会的に極めて重要な取組である。各地域の認証材が産地でも都市部でも広く活用されることで、木と接点を持ちにくい地域や利用者層にその価値を訴求することができる。



徳島の樹齢70年の杉を余すところなく使った洗練された空間

奨励賞（審査員長賞）

ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野

徳島県の体験型施設 「TurnTable（ターンテーブル）」

株式会社フォレストバンク（徳島県）、株式会社Turn Table（徳島県）、株式会社ゲンボク（徳島県）

国内初の取り組みとして実践されている、地方の自治体が県外にPR目的で宿泊機能を有する施設「オーベルジュ型のアンテナショップ」である「Turn Table」。運営を手掛ける株式会社フォレストバンク代表、岡田育大さんはオーブンの狙いをこう話す。

「場所は渋谷区神泉で、大人の空気感のある場所。1、2階はレストラン、3〜5階はホテルとなっていて、トータルで収支がとれる仕組みをつくっています。この場所を象徴するレストランの長テーブルや床等、内装や家具の多くは徳島県神山町の山に分け入り、つくるモノから逆算して杉の選定を行い、樹齢70年、高さ30mの杉を一本無駄なく使っています。床材の色も黒っぽいものと白っぽいものがありますが、これは丸太の中心部と外側の部分を使い分けてデザインしてもらい、デザイナーや関係者と一緒に材にしていきました。現場の作業のなかで、綺麗な木目を発見したらそれを使おうとなり、材の調達のストーリーをレストランでお客様に伝えたりしています。また、地域の文化である藍染のワークショップや生産者とのワークショップも実施しています」。

運営面では、あえて店内に県名を出したり、県のPR施設だという発信は行っていない。全国や海外から旅をする旅行者が徳島の食や文化を味わい、体験することで、徳島の魅力を旅行者自らが発見し、旅行、仕事の取り引き、移住など、それぞれの目的で徳島への回帰を誘発することを目指している。

岡田さんは徳島県の林業を古くからやっている19代目の林業家である。山林は

2000ヘクタール、ドーム400個分ほど。木材市場であるゲンボクの運営、工務店の運営も手掛ける。

「東京に徳島の情報発信と交流の拠点をつくる」というこの事業の本質が、木を切り出した山を所有する金泉氏の言葉に表現されていると思います。これも僕のひい爺さんくらいが植林した木なんですね。私たちがいるの世代が大きくなったら有効利用してくれるって、僕のために植えてくれたような木なんですね。こうやって人のために、特に都会に行つて都会の人がいいなあ、神山杉いいなあって一人でも思ってくれたら僕は非常に幸せです。その想いが伝わるような運営を心掛けていきたいと思っています」。

ホステルの利用者の6〜7割が外国人観光客であり、その人たちにもここをきっかけに徳島へいかに来てもらえるかを考えている。音楽もこの施設のために作曲し、地元の水の音や木々の音、汽車の音が入っている。「ターンテーブルは、回帰する食卓」とい



地域の魅力の発信と交流は、「食卓」から

評価ポイント

オール徳島を五感で感じ、味わえる複合体験施設。本来、不可分である地域の食や観光・文化と、空間を演出する木の良さを高度なデザインで融合させた良質な取組。

【費用・参加費・入場料など】

宿泊料金：1泊4,723円〜（朝食付き）※徳島県民は10%オフ レストラン：5,000円（4皿）〜8,000円（7皿）のコースメニュー

【体験・入手方法（連絡先）】

東京都渋谷区神泉町10-3 ホテル：03-3461-7733 レストラン：03-3461-7722 問い合わせ：<http://turntable.jp/contact02>



岡田育大さん

う意味ですが、ターンというネーミングには徳島へ来てもらう、と同時に徳島自身もチェンジするという思いも込めています。テーブルを囲みながら、東京から徳島へ戻していくものをみんなで探しているような感じです」。

新しいものを見せる姿勢を続けること、新陳代謝が行われていること、それを見せること、それが飽きさせない工夫であり、次を見たい感じたいと思わせる工夫なのだと岡田さんは語る。徳島が持つコアバリューを活かしつつ、今の暮らしにマッチした価値を生み出していく、そんな魅力的な木にあふれた施設である。



木の美しさがほのかな光でより際立つ、五感に訴える照明

a piece of forest は、隠岐の島の森を守り育ててきた、創業128年の歴史を誇る池田材木店の厳選された杉を使い、神社の修繕を手掛ける伝統を受け継ぐ島大工を擁する吉崎工務店が製作した照明家具のシリーズである。細木の中に光源が組み入れられており、ほのかに浮かび上がる木の美しさと柔らかな光を生み出す。シンプルで間を生かすフォルムは、世界のインテリアデザイン市場を意識した光のオブジェ・アートとしても存在感を放つ。また、杉は安いという概念を打破し、日本の繊細で高度な技術が生きる、高級感を演出できる照明とした。

開発を手掛けた株式会社ワイス・ワイス代表、佐藤岳利さんは語る。

「ワイス・ワイスは豊かな暮らしをテーマに22年前に起業しました。ファストフアニチャーが台頭してきた時代で低価格競争は泥沼化していきました。そのなかで違法伐採問題が取り沙汰され、弊社は国際環境NGO FSC Japan と組み、2008年にフェアウッド宣言をし、オリジナル家具すべてをフェアウッド100%にしました。日本中に木がたくさんあるのになぜ使っていないのか、という問題意識から、今では国産材の使用率は全体の売り上げの80%、昨年はFSCのCO2認証、今年はクリーンウッド法の登録事業者にもなりました。そのなかで生まれたひとつが、a piece of forest です。沖ノ島はいま、松くい虫の被害で壊滅的打撃を受けています。地元若者から黒松と杉の出口をつくりたいと相談を受けたのがきっかけでした。島内最後の製材所・池田材木店と組んでつくったのが、この照明器具です。

ここは対岸に出雲大社があり、島のなかにもたくさん神社があり、地域には組み木の建具職人が多くいますが、やはり仕事がない現状があります。材料もあり、技術もある。ヒット作をつくるしかないと考えました」。

デザイナーには国内外の高級ホテル・飲食店などを多数手がける橋本夕紀夫氏を起用した。また、ワイス・ワイス独自の地域産材調達ネットワーク・森をつくる家具プロジェクトでは、互いの地域の課題解決や市場開拓方法などを参考にしたり、連携していくことができる。例えば、出雲のたたら製鉄と隠岐の島は連携可能と考えている。隠岐の島は「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」に指定され、国内外・観光産業PRに力を入れている。隠岐の島の観光課との連携による広報、モックレ展への出展、同社店舗による照明の新作発表会を行った。

「地域に仕事をだすと5倍の経済効果があり、経済的な循環も起きます。顔が見える関係も大切、あたたかな人間関係がつけられることが重要です。魅力的な地域の木を地



地域の材を、地域で加工し、良品と経済効果を生み出す

域の事業者加工してもらう事例はほかにもあります。琵琶湖のリゾートホテルでは、地域のいろいろな木をつかって内装を施工しました。地域の人とながり、長崎のセンドンを使ってリノベーションしたホテルもつくりました。また、健康をテーマとしたオフィスの木質化も需要が増えています。ドリーム・アーツは恵比寿のIT企業ですが、オフィスの木質化を実施しました。扉をあけると木の香りがし、社員のモチベーションも上がり、売り上げもあがっているということです」。

審査会では、「建具屋がつくる照明器具という発想はユニークなアプローチである。地域には歴史も文化も技術も資源もある。人間関係を通じて、その価値を高め、ビジネスにつなげていく。その良質なモデルであると言えよう」と高く評価された取組である。

評価ポイント

木の間接照明となる灯の柔らかさが実に心地良い。デザインに組手や仕口を取り入れた職人技をシンプルに伝える形で、夜は抽象的な光のアート、昼はインテリアに飾るオブジェとして機能している。

【仕様・価格】

（HY-101）300mm×65mm×300mm/2,000g/ 88,000円

【入手方法（連絡先）】

ワイス・ワイス表参道店 渋谷区神宮前5-12-7 03-5467-7001 <http://wisewise.com>



佐藤岳利さん



奨励賞（審査委員長賞）

ライフスタイルデザイン部門 木製品分野

MOKULOCK・KODOMOシリーズ・OTONAシリーズ

株式会社 ニューテックシンセイ（山形県）



【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】
(KODOMO) 70×70×65/95/3,400/竹中木工道具館、
Hacoa、山形県森林組合連合会、三越伊勢丹、無印良品（OEM商品）



【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】
地方創生事業として、デザイン費や展示会費等を補助。展示会、フォーラムを入
場無料にて実施。/2018年2月16～18日の3日間、福岡市中心部にて展示会を
実施、内容をまとめた大川TATEGUMI冊子は建具組合にて配付中。今年度は第
二弾となる計画も進行中。



【連絡先】
松浦一級建築設計事務所 <http://www.matsuura-home.co.jp/>

奨励賞（審査委員長賞）

ライフスタイルデザイン部門 建築・空間分野

下北の自然な家（青森県）

松浦一級建築設計事務所 松浦良博（青森県）、
有限会社松浦建設（青森県）

概要
下北の自然の中から生まれてきたような家。人間の
本来の豊かな生活を取り戻す。「下北の自然な家」
は本州最北端下北半島の青森ヒバをふんだんに使用
した住宅。青森ヒバに含まれる、ヒノキチオールに
よる抗菌効果や豊かな香りによるリラックス効果が家
族が健康かつ豊かな生活ができないかと考え計画し
た。
開発に対する評価ポイント
地域資源であるヒバの持つ効能を最大限に活かし
た、居心地の良い空間である。地域の資源を暮らし
の快適さや人の健康に取り込み、地域の恵みにひた
ることができる。



奨励賞（審査委員長賞）

ライフスタイルデザイン部門 コミュニケーション分野

大川TATEGUMI

大川建具事業協同組合 大川TATEGUMI（福岡県）、一般財団法人大川イ
ンテリア振興センター（福岡県）、ハコと場をつくる株式会社SAITO（福岡
県）

概要
木工産地「大川」で、大川建具事業協同組合の有志
と（一財）大川インテリア振興センターが連携して
取り組む次代の「建具」を考えるプロジェクト。職
人と建築家が直接つながるチームを編成。全4つの
チームがそれぞれの叡智を集めて、建築家が「描い
た形」を職人が「モノ」にし、プロトタイプとして
仕上げた。福岡市内の展示会で発表し、新しい可能
性を示した。
開発に対する評価ポイント
建具職人と建築家のコラボレーションによるプロダ
クト開発である。建築の新たな発想や切り口を取り
入れることで、建具という技術も次のステージが見
えてくる。多様な異業種、専門家とのコラボレーシ
ョンによる今後の展開に期待できる。



【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】
(幅80cm)800×500×700/12,000/36,750/
<https://www.hinoki-furniture.com/desk/desk7.html>

奨励賞（審査委員長賞）

ライフスタイルデザイン部門 木製品分野

ひのきかご机

株式会社ヒノキ・ワークス（石川県）

概要
リビング学習や、塾等で使用する机。主婦の家事ス
ペースの机として活用できる、軽量で持ち運びでき
る頑丈な机。天板は無垢ひのき材で、天然の木目が
目に優しい。天板から腕に伝わる木の温かみが心地
良い。
開発に対する評価ポイント
引き出しがなく、軽量で持ち運びできる頑丈な机で
ある。シンプルながら、しっかりとしたつくりで長
く愛されるプロダクトとして評価できる。使い続け
て欲しい思いをデザインで表現した、奇をてらった
ところのない良品である。

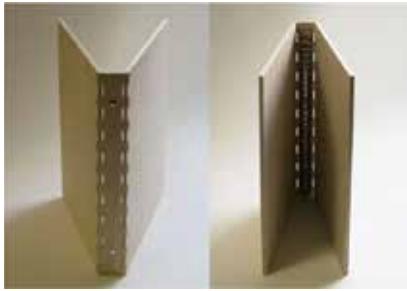


奨励賞（審査委員長賞）

ハートフルデザイン部門 木製品分野

wood butterfly

ぶろべら社（東京都）



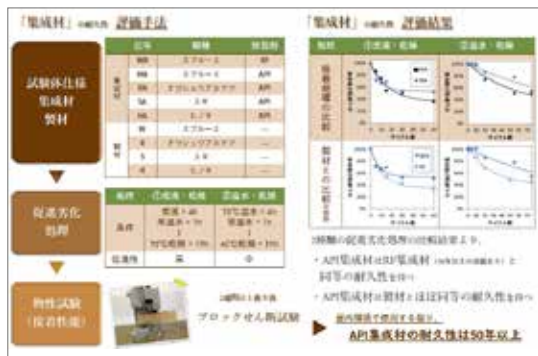
【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】

35mm×225mm×285mm/100g/10,000円/
creema <https://www.creema.jp/item/972253/detail>

概要
Wood Butterflyは蝶番がない世界初の木製のバインダー。バインダー自体が蝶番の役目をしており、一見不思議でユニークな形状をしている。木の手触りを楽しんで頂くとともに、使うたびに手になじみ、長く使っていくうちに味わいが出るよう敢えてニスを使わず無垢のまま仕上げた。
開発に対する評価ポイント
ビジネスシーンや暮らしのなかで日常的に使われるバインダーに着目。バインダーが木でできていること、蝶番がないことにまず驚く。持った際の質感も良く、その表情の変化を楽しみながら、長く使いたくなる日用品である。



耐久性が評価された国産集成材の構造柱



【閲覧・入手方法/技術提供の方法】

促進劣化試験の結果を以下にて公開。【集成材の接着耐久性評価】第64回日本木材学会大会研究発表要旨集(2014)、「木質パネルの接着耐久性評価」第68回日本木材学会大会研究発表要旨集(2018)/学会ホームページ等より、研究成果を入手可能

奨励賞（審査委員長賞）

ライフスタイルデザイン部門 技術・研究分野

住宅の長期使用を実現する木質材料の接着耐久性評価に関する研究

積水ハウス株式会社（大阪府）、国立大学法人静岡大学（静岡県）

概要
本研究は、木造建築物の安全性に関して大きく影響を与える要因である接着要素に対し、その構造強度を損なう恐れがある劣化に関する評価を行うものである。まず木材使用量が多い集成材に対し研究を行い成果を得た。その後近年JISに加えられた構造用MDF・PBに対し、釘接合時の耐久性の評価を行った。
開発に対する評価ポイント
重要であることが認識されつつも研究対象としてはなかなかハードルの高かった、木質材料の接着耐久性という分野に挑んだことは素晴らしい。新たな技術、製品の市場投入が増加するなか、こうした地に足の着いた実験・実証は大変重要である。



奨励賞（審査委員長賞）

ハートフルデザイン部門 木製品分野

kibori ブローチ

芦野和恵（山形県）、山形県工業技術センター（山形県）



【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】

(tori 1)55mm×32mm×17mm/3g/5,600円/
都内：フクモリマーチエキュート神田万世町店 <http://fuku-mori.jp/manseibashi>、山形蕎麦茶寮 月の山
山形県内：GEA、東北芸術工科大学 TUAD STORE、王将果樹園

概要
kibori ブローチは、国指定伝統的工芸品山形仏壇彫刻の材料、モチーフを活かして山形仏壇彫刻師芦野和恵が製作したブローチ。彫刻に使用されるシナ材は白く美しくしかも軽い、薄手の衣類につけても軽くて垂れない、ターゲットの若い女性等今まで仏壇に興味を持っていなかった方へアピールした。
開発に対する評価ポイント
白い木肌の細やかな造形が見る者の目を引き、これまでになかったアクセサリである。仏壇彫刻の伝統的な技を活かしながら、木ならではの軽さのメリットも併せ持ち、ターゲットの若い女性等、今まで仏壇に興味を持っていなかった消費者へのアピールに成功している。



【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】

(泣いた赤おに) 35mm×35mm×50mm/17g/1,200円/
つたや物産 山形県米沢市小野川町2458 0238-32-2805
<https://www.komav7.com/>

奨励賞（審査委員長賞）

ハートフルデザイン部門 木製品分野

飾りコマ

株式会社つたや物産（山形県）、株式会社コロソ（山形県）

概要
オナメントの機能を持たせたデザイン独楽。遊んでいる時間以外の方が長い独楽に台座を組み合わせることで、飾って楽しむことができる。5 cm程の大きさなので、窓辺や書棚、食器棚などの身近なスペースに飾ることができる。昔ながらの逆立ち独楽やひねり独楽等を使用している。
開発に対する評価ポイント
伝統と現代の暮らしをうまくミックスさせ、素朴だがこれまでのコマにはない個性を感じさせる玩具。遊んでいない時間は、空間を彩るアイテムとして「見せる」コマという発想が面白い。木地玩具制作とデザイン事務所のコラボレーションも新しい。



奨励賞（審査委員長賞）

ソーシャルデザイン部門 建築・空間分野

南三陸町役場庁舎／歌津総合支所・歌津公民館（宮城県）

株式会社 久米設計+ピークスタジオ一級建築士事務所（東京都）、南三陸町（宮城県）、銭高・山荘特定建設工事共同企業体（宮城県）、南三陸森林管理協議会（宮城県）、南三陸森林組合（宮城県）



【連絡先】

役場庁舎 宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田101
総合支所 宮城県本吉郡南三陸町歌津字管の浜60



【連絡先】

自由学園 男子部（中等科・高等科）
東京都東久留米市学園町1-8-15 042-422-3111(代)

奨励賞（審査委員長賞）

ハートフルデザイン部門 コミュニケーション分野

自由学園男子部 80年の木の学び

自由学園男子部[中等科・高等科]（東京都）

概要
自由学園男子部では1935年の開学以来、新入生は自分の学習机・椅子作りをしてきた。近年では、1950年より高等科生が埼玉県飯能市で行ってきた植林活動で育てたスギを、材料として本格的に利用できるようになった。長年続けてきたこれらの活動を通じて、環境と生活のつながりを考える「木の学び」を実践している。

開発に対する評価ポイント
高校2年生が山から伐りだし加工した木材を使って、中学1年生が教室で使うための木製の机と椅子を自分で作り、高校3年の卒業まで6年間使う取り組みを開学以来約80年続けている。生徒たちの「木の学び」を大切にする、世代間交流にもつながっている、継続的な取組として評価できる。

奨励賞（審査委員長賞）

ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野

新木場海床プロジェクト

新木場海床プロジェクト（以下、東京都）、株式会社榎戸材木店、新木場相原 あいはらの木、瀧口木材株式会社、株式会社ZNEM、光風舎一級建築士事務所



【費用（参加費・事業費など）/体験・入手方法（連絡先）】

参加費：いかだ上での茶道体験 1,000円、燻製器作成ワークショップ 2,000円、燻製ワークショップ 1,000円/イベントはホームページ、フェイスブックにて告知 HP: <http://www.umidoko.jp> shinkiba.umidoko.1008@gmail.com

概要

東京江東区、新木場地区は木材の流通基地として運用され、海には丸太が浮き、世界の木材が集まってきた。だが、最盛期には700程度の材木関連業種が集まったこの町も、いまでは海から丸太が消え、木材業者も減少している。このプロジェクトは海を含めた新木場に新たな木のある風景をつくるプロジェクトである。

開発に対する評価ポイント
歴史的にも木とゆかりの深い新木場の地に、新たな木のある風景をつくるプロジェクトで、水上での木製アートの展示や木製楽器で木の音を楽しむイベント等を展開。木の文化の発信とそれを現代に楽しむ発想力が秀逸である。「場」をつくり、「五感」に訴えることで、参加する側も、それを風景としてみる側も楽しめる。



【連絡先】

北海道上川郡下川町一の橋607
01655-6-2125 01655-6-2126(FAX)

奨励賞（審査委員長賞）

ソーシャルデザイン部門 建築・空間分野

下川町のトドマツオフィス（北海道）

内海彩建築設計事務所（東京都）、下川町（北海道）、王子木材緑化株式会社（東京都）、桜設計集団 佐藤孝浩（東京都）、盛永・金子・三賀経常建設共同企業体（北海道）

概要

トドマツは、北海道内では最大蓄積量があるが、「水食い」に起因する乾燥時のねじれや割れが多く、製材の利用が進んでいない。このプロジェクトでは、木材供給者と設計者が協働し、トドマツに適した乾燥法の研究開発に取組み、土台を除く全構造材と内部のフローリングや壁仕上げにトドマツを用いた建築を実現させた。

開発に対する評価ポイント
地域の未活用資源であるトドマツの材としての可能性を引き出し、実際にオフィスとして活用した意欲的取組である。使いながらエビデンスを収集・分析することで、価値ある成果につなげることができるだろう。



【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】
1,555mm×1,700mm×2,170mm/50,000g/6,000,000円/
京源 <http://www.kyo-gen.com/>

特別賞(木のおもてなし賞)

ソーシャルデザイン部門 木製品分野

USARA

株式会社 京源(東京都)、チャンネルオリジナル株式会社(神奈川県)、株式会社 AZOTH(宮城県)、荒川技研工業株式会社(東京都)

概要
屋久島の林業の歴史的背景と課題の中で、天然資源として保護される屋久杉ではなく、丸太やチップ用材として搬出される人工林の屋久島地杉を活用。環境が生み出す性質により木球としての加工が容易となり、その木球をふんだんに使用し、日本の伝統的な家紋、日本文化に馴染みの深い桜と梅を3Dで表現したオブジェ。
開発に対する評価ポイント
縄文杉や屋久杉が知られる屋久島だが、杉材の産地としての歴史的背景がある。日本をイメージさせる桜と梅をデザイン、木球に加工した杉を立体的な造形で表現した。伝統的な家紋の継承と地域の材への思いが伝わるオブジェになっている。



【費用(参加費・事業費など)/体験・入手方法(連絡先)】

現地見学は無償。DVDに関しては送料等、少額の実費程度/毎年3月18日に現地の見学会を開催予定。CLT建築物の経年変化を観察することのできる機会を設ける。現地に来れば誰でも参加可能。

奨励賞(審査委員長賞)

ソーシャルデザイン部門 コミュニケーション分野

「南房総千倉CLT収納庫」プロジェクト

弁護士法人匠総合法律事務所(東京都)、岐阜県立森林文化アカデミー(岐阜県)

概要
本プロジェクトは、CLT構造の建物を実際に建築することを通して得た知識、経験、ノウハウを施工業者・設計者・行政等に広く伝え、CLTの普及、ひいては日本の林業再生や地域工務店の将来の仕事確保、木造建築物の担い手育成を目的としている。
開発に対する評価ポイント
体験型でCLTの可能性をさまざまな関係者へ広める、啓発的意味を持つ重要な取組である。CLTのディープラーニングを実践し、CLTの可能性をさまざまな関係者へ広めるコミュニケーションプログラムになっている。CLTの利活用の際にも、体験に基づいた提案は説得力が高い。

特別賞(木のおもてなし賞)

ライフスタイルデザイン部門 木製品分野

斗組テーブル

有限会社守屋建具店(岡山県)



【幅×奥行×高さ(mm)/重量(g)/価格(円)/入手先】
2,400×1,200×720/7,500/680,000/
守屋建具店 <http://www.furusu.jp/>

概要
公共施設やオフィスのミーティングルーム、宿泊施設など人が集まる空間で使用できるビッグサイズのテーブル。斗組という伝統建築技法を使ったスタイルは、耐久性に優れ木組みの構造が見た目に美しいのが特徴。天板をガラスにすることで圧迫感を感じさせない。設置場所によってサイズ変更が可能。
開発に対する評価ポイント
伝統建築物において柱の最上部や軸部の上に設置され、軒桁を支える斗組の構造を使った重厚感あるテーブルである。ガラスの天板から見える構造美は寺社建築を見ているかのような感覚を覚える。ヒノキの白木の美しさを味わいつつ、経年変化を楽しむように無塗装にしている点も日本の建具や建築文化に通じる特徴である。

審査委員からのメッセージ

★ 分野長

コミュニケーション分野



山崎 亮

コミュニティデザイナー、株式会社studio-L 代表、東北芸術工科大学教授。まちづくりのワークショップなど地域の課題を地域住民が解決するコミュニティデザインに携わる。

素材や地域、歴史などの物語をより多くの人に伝えるためには、それを手に取ってみたいになったり、人に伝えたい工夫が必要だ。人々の共感を持って社会課題を乗り越えていくことがデザイン。参加したいという思い、自分の選択が課題解決につながる仕組みなど、人々の行動を促し、その結果、森や山に良い状態をつくっていくことが重要だ。



古田秘馬

プロジェクト・デザイナー、株式会社umari代表。数多くの地域プロデュース・企業プランニングなどを手がける。海外に日本の食文化を伝えるPeace Kitchenプロジェクトを展開中。

森の活用と何を結びつけるのかが重要なポイントだ。コミュニケーションの視点で大切なことは、人々の生活の中にいかに巻き込んでいくか、普段、木や森を意識していない領域にいかに入り込んでいくか、である。IoTのようなテクノロジーを使うことで、さらに可能性が広がる取組は今後もたくさん出てくるだろう。



戸村亜紀

クリエイティブディレクター。ロゴデザイン、プロダクト開発など幅広く活躍。環境問題や地域産業復興などを通じて次世代の居場所と出番の創出を目指した取り組みを行う。

コミュニケーションにとって大切なポイントは、モノという存在を超えて言葉として語り継げるか、作品を通じて体験したことを他の人に伝えることができるか、である。ワークショップであれば、参加した人が作品を家に持ち帰り、あとで言葉にできるか、まですポートすべきなのである。



日比野克彦 ★

アーティスト、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。舞台美術やパブリックアートなど、多岐にわたる分野で活動中。一般参加者と地域特性を生かしたワークショップも手がける。

木を魅力的だと思わない人はいないと思うが、それは意識しないと気付かないほど、ささいな魅力で、それは木ならではの特徴でもある。日常のなかで木の魅力を再認識し、自分のコミュニケーションに木の魅力を活かす、そんな行為を呼び掛けることが本賞の役割だと考えている。

技術・研究分野



恒次祐子

東京大学大学院農学生命科学研究科 生物材料科学専攻材料・住科学講座 准教授。木質居住環境の快適性評価、木材利用による温暖化防止効果の定量的評価などを研究。

技術・研究分野としては明確なデータや科学的な検証などをアピールして欲しい。樹種ごとの特性を活かした用途開発といった視点も面白いと思う。地域には未利用資源もまだ多くあり、そこに用途や価値を与える研究は今後、注目される。また、経年変化や長期間の利用による影響などの視点も重要である。



青木謙治

東京大学大学院農学生命科学研究科 生物材料科学専攻材料・住科学講座 准教授。建築物の壁面・床面などの耐力評価を主な研究テーマとして多数の研究成果を発表。

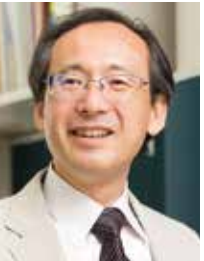
技術・研究分野は、商品化前の技術開発やデータをとる試作品開発を対象としているので、この材をもっと使いたいとか、木材の隠れた魅力をアピールしたいなど、コンセプトが重要だ。それをプレゼンテーションにうまく表現して欲しい。リグニンなど木の成分を活用する動きも顕著で、木材がさまざまな視点で評価されてきたことは嬉しい。



相茶正彦

木材利用・バイオマスコンサルタント、株式会社エス・アール・シー取締役。木質系資源活用コンサルタントとして、各地のプロジェクトのコンサルティング、リサーチを実施。

これまでの受賞作品に新たな技術やノウハウをプラスした作品や、バイオマス・ケミカルへ展開した作品もあり、広がりが見られた。木の有用性を重視するとともに、地域社会への貢献度なども評価のポイント。今後も、地域の林業関係者が地元大学と組んだ共同研究など幅広い連携がある、新たな取組が増えて欲しい。



伊香賀俊治 ★

慶應義塾大学理工学部教授。建築と都市を対象としたサステイナブル建築デザイン、ライフサイクルアセスメント、建築効率評価、環境・エネルギーシミュレーションを研究。

一般の方が木の良さを感じられる製品や建物など、説得性のあるデータを添えて応募していただきたいと感じた。地域には固有の木があり、気候風土もさまざまなので、地域ごとにより深い研究や開発で特色が出てくる。結果、それがその地域の産業や研究を活性化し、元気にする源になると嬉しい。



審査委員長 赤池 学 プロジェクトデザイナー、科学技術ジャーナリスト

ウッドデザイン賞も4回を数え、作品のレベルは確実に上がっていると感じている。今年の最優秀賞は都市部での大規模木造建築に取り組み、近年注目されるアクティブラーニングへの仕掛けを随所に設けた小・中学校。最近では大規模施設や学校、病院などにおける木材利用は広まりを見せつつあり、これまでにない木材の効能・機能を生かした意欲的な製品も登場している。キーワードは、地域と業種を超えた「協業」。ウッドデザイン賞を通じて、その範となる、幅広い分野からの参画と連携に挑戦して欲しい。

建築・空間・建材・部材分野



手塚由比

建築家、株式会社手塚建築研究所共同代表。雪に埋もれる自然科学館キョロロや楕円形の屋根で子供が遊ぶふじようちえんなどを手掛け、日本建築学会賞などを受賞。

ただ単に木を使ったという事実を超えて、木を使ったからこそ、こんな良いデザインになった、といったデザイン性が重要になってくる。建築家としてみると、木にも長所・短所があり、トータルでコスト、デザインも含め、適量で使いながら、デザインのバランスの良さを考えていく必要がある。



鈴木恵千代

空間デザイナー、一般社団法人日本空間デザイン協会会長。商業施設、ミュージアムなど幅広いデザイン、アートディレクション等を手掛ける。

デザインの重要な点は美しさであり、美しさはそもそもバランスである。どこを厚く、大きくするか、屋根をどこまで上下するか、そこを意識すればレベルがもっと上がる作品も多かった。日本には多くの木の産地があり、産地に木の特徴の知見が埋もれている。そこを訪ね、掘り起こしていくことが大切だ。



腰原幹雄

東京大学生産技術研究所教授。構造の視点からさまざまな材料の可能性を追求。新しい木の可能性について考えるNPO法人teamTimberizeを設立、理事長を務める。

構造や防耐火技術のような新技術を使えば新たな建築ができたが、その先の空間や生活を見るべき。木材は変化し、味わいを増す。そのような建材の使い方も意味がある。汎用的な材を使って多くをつくる木造の世界と、川上から川下までの流れの中で地域の多様な木を使っていく特殊解のような使い方、その双方を考えて欲しい。



隈 研吾 ★

建築家、東京大学教授。土地の環境、文化に溶け込む建築を目指し、ヒューマンスケールのやさしく、やわらかなデザインを提案。国内外で木の建築作品が多数。

賞の主旨である健康増進や癒し効果、学びや感性を伸ばすために木をうまく活用している作品が増えた。今後は地域の材を使い、食や観光と連携した建築や施設が注目される。2020年を契機に、インバウンドに対しても日本の木の文化や木のおもてなしを世界へ発信して欲しい。

木製品分野



矢島里佳

株式会社和える代表取締役。"0から6歳の伝統ブランドaeru"を立ち上げ、日本の伝統を暮らしの中で活かしながら次世代につなぐ様々な事業を展開。

この賞はプロセスを重視しており、木でできているから、ではなく、本当に魅力的な製品であり、その背景には日本が抱える林業の課題があり、それを手に取ることによって課題解決の一翼を担えるという逆の入り口を生み出すことが大切。モノとして美しいだけでなく、生み出されるプロセスも美しいことが大切だ。



高橋正実

クリエイティブディレクター・デザイナー、MASAMIDESIGN代表。コンセプトワークを得意とし、プロダクト、インテリア、空間など幅広いジャンルで活躍。

椅子やテーブルなどこれまでにあったものからの発想より、もっとダイナミックな発想で木を使う方法の提案を期待したい。日本には森を守り、森を育て、マネジメントする知恵と体制があった。木をうまく活かし、この生態系としてのベースを持っている日本人がそれをもっとダイナミックに使う知恵に転換できるとよいと思う。



島村卓実

プロダクトデザイナー、クルソリンク代表。幅広いジャンルでデザインを提案し、各地域振興を目的にしたデザインプロジェクトやワークショップをプロデュース。

木の面白さはひとつひとつが違うこと。これは他の素材にはないことで、人間的でもある。それを活かした表現が、木を使う面白さである。その製品ができた「意味」を伝えるためには、製品に地域全体の良さを圧縮すること。森・地域・職人・クリエイターが一緒になって意味を考えて、製品をつくるべきなのである。



益田文和 ★

インダストリアルデザイナー、株式会社オーブンハウス代表。地球環境の要因を基軸とするサステイナブルデザインを研究テーマとして、様々な製品デザインを手掛ける。

プラスチックを始め、人工的な素材がいま大きな環境問題を引き起こしている。木を始めとした自然素材の有効活用を本気で考える時期が来ている。木は日本人にとって一番使い勝手の良い素材。百年のオーダーで我々の持つ資源をどう使うか、ウッドデザイン賞を通じて、その解を求めている。

応募対象分野

木に関するあらゆるモノ・コトが応募可能です。

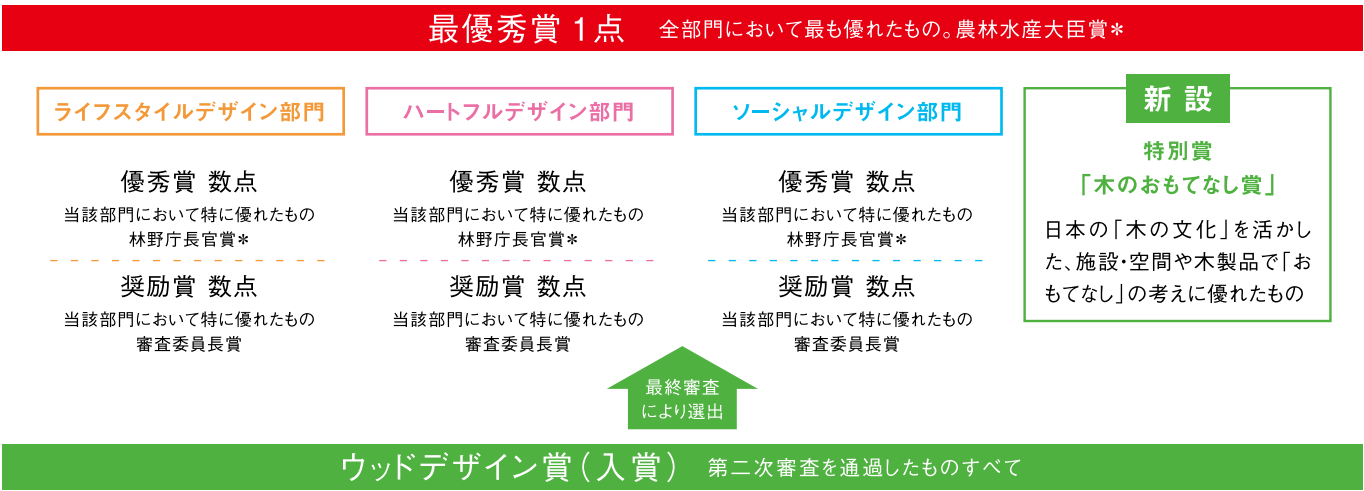
応募対象分野及びサブカテゴリを選んでエントリーしていただきます。

分野	中分類	サブカテゴリ
建築・空間 建材・部材分野	店舗・施設関係	店舗・商業施設、オフィス・会議施設、ホテル・旅館、子育て・学習施設、保育園・幼稚園、学校、病院・福祉施設、公共施設、モデルハウス・ショールーム、工場・倉庫、寺社・仏閣、屋内空間
	住宅関係	戸建・注文住宅、量産型住宅、集合住宅
	リノベーション	住宅のリノベーション（古民家再生含む）、店舗・施設のリノベーション、オフィスのリノベーション
	屋外空間	公園、造園・緑化、外構、街づくり
	建材・部材	構造材、床・壁・内外装材、開口部（窓・ドア）、インテリア、エクステリア
木製品分野	その他	その他
	一般消費者向け	家具（ベッド含む）、雑貨・日用品、キッチン・食器、容器・パッケージ、寝具、照明器具、遊具・玩具、文具、楽器、伝統工芸品
	事業者・施設向け	オフィス・施設用家具、オフィス・施設用照明、オフィス・施設用設備、什器、店舗内装・装飾、大型遊具
コミュニケーション 分野	その他	その他
	各種活動・広報PR	イベント・ワークショップ（単発）、イベント・ワークショップ（定期開催）、普及・啓発（システム）、普及・啓発（ツール・メディア）、プロモーション（単発）、プロモーション（定期開催）
	パートナーシップ	ビジネスモデル、仕組み・ネットワーク（生産・加工・流通・販売をつなぐもの）、制度・条例（生産・加工・流通・販売をつなぐもの）、マッチング・サポート体制
	人材育成・人材開拓	教育・研修システム、資格・制度、イベント・表彰、ワークショップ（人材育成）、ワークショップ（人材開拓）
技術・研究分野	その他	その他
	技術	新たな工法・素材活用の技術、新たな製造・加工の技術、新たな流通・販売の技術、その他の技術
	調査・研究	木材利用の機能や快適性を高める調査・研究、木材利用の環境や社会性を高める調査・研究、木材の流通や販売促進に寄与する調査・研究、その他の調査・研究
	試作物	試作品、展示用製作物、実験住宅・施設、その他試作物 （新規性ある、各種の技術・研究・素材・設計を実証、検証するために実際に制作されたもの）
技術・研究分野	その他	その他

ウッドデザイン賞の構成

ウッドデザイン賞は以下の構成によって実施されます。第二次審査を通過した作品には「ウッドデザイン賞」が付与されます。

ウッドデザイン賞受賞作品の中から、最終審査を経て、最優秀賞・優秀賞・奨励賞・特別賞が選出されます。



ウッドデザイン賞2018実施概要と結果

ウッドデザイン賞は、木の良さや価値を再発見させる製品や取組について、特に優れたものを消費者目線で表彰し、木材利用を促進する顕彰制度です。建築、木製品、取組、技術・研究など木材利用促進につながるすべてのモノ・コトを応募対象としています。

- 主催:ウッドデザイン賞運営事務局((特)活木活木森ネットワーク、(公社)国土緑化推進機構、(株)ユニバーサルデザイン総合研究所)
- 林野庁補助事業 ●募集期間:2018年6月20日(水)ー7月31日(火)

- ウッドデザイン賞2018結果
総応募数393点 入賞189点(入賞のうち)最優秀賞1点 優秀賞9点 奨励賞15点 特別賞3点

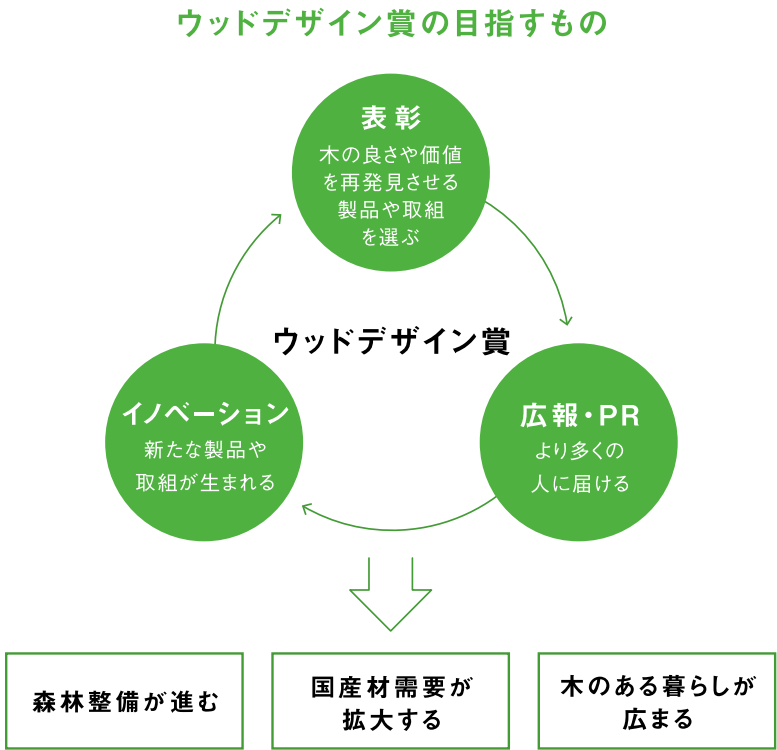
創設の趣旨

我が国においては、戦後造成した人工林が本格的な利用期を迎えており、適正な森林整備を進めていくためには、国産材の積極的な利用を促進していくことが重要です。

ウッドデザイン賞は、木の良さや価値を再発見させる製品や取組について、特に優れたものを消費者目線で評価し、表彰する新しい顕彰制度です。

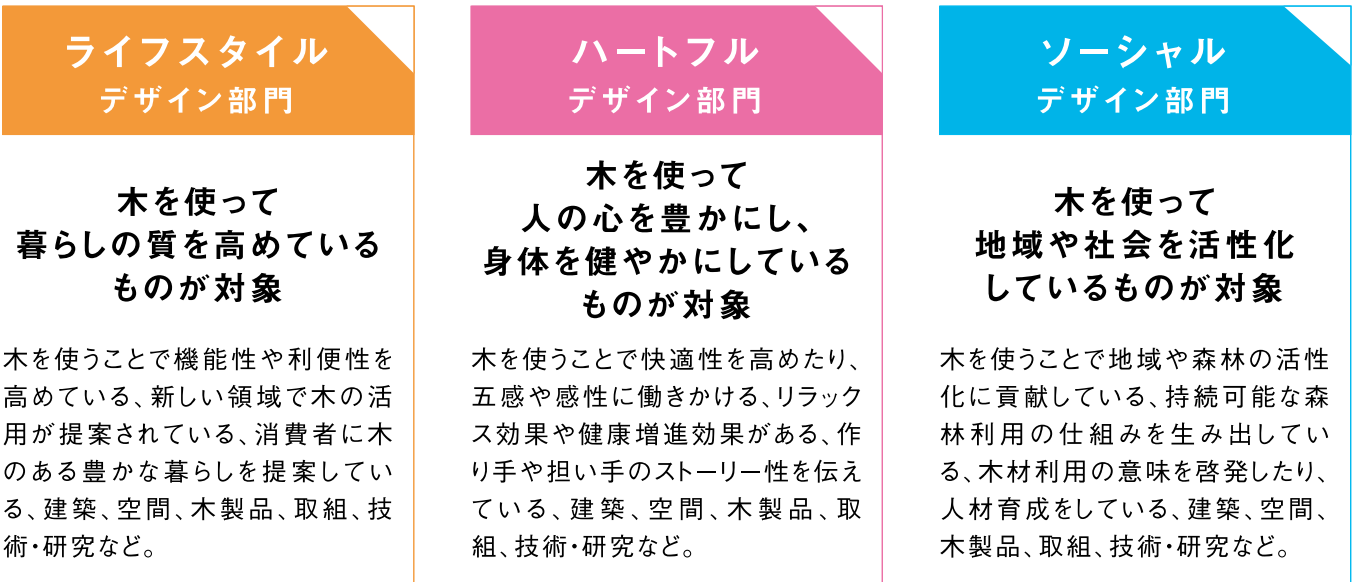
これによって“木のある豊かな暮らし”が普及・発展し、日々の生活や社会が彩られ、木材利用が進むことを目的としています。

受賞者には、様々な広報・PRの場を提供するとともに、生産から消費に関わる人のマッチングを進めていきます。



表彰部門

ウッドデザイン賞は以下の3つの表彰部門を設け、消費者目線の木の良さや価値を持つ優れた製品や取組を表彰します。部門については、応募作品の特徴・内容と評価してほしい価値に合わせ、エントリーの際に応募者自らが選択します。



ウッドデザイン コンセプトブック 2018
WOOD DESIGN CONCEPT BOOK 2018

発行日 2019年3月26日
発行人 ウッドデザイン賞運営事務局
発行所 105-0004
東京都港区新橋2-13-6 新橋862ビル 8階
ウッドデザイン賞運営事務局(ユニバーサルデザイン総合研究所内)
電話 03-6550-8360 FAX 03-6550-8361
デザイン 則武 弥(ペーパーバック)
印刷・製本 家具新聞社

Copyright © by Japan Wood Design Award
無断転載・複写を禁じます。掲載されている情報は2019年2月時点のものです。
ウッドデザインコンセプトブック2018に使われている用紙はすべて間伐材を活用しています。

受賞後の展開

ウッドデザイン賞の受賞作品は以下の特典、広報が受けられます。

- ウッドデザインマークの使用

ウッドデザイン賞を受賞した作品は、ウッドデザインマークの使用が認められます。
マークを表示することで受賞の成果を訴求することができます。



ウッドデザインマークのデザインについて

日本の豊かな森の恵みを表す三角形に、「WOOD DESIGN」(W)を重ねたイメージ。アンシンメトリー(左右非対称)に連なる造形は、暮らしを豊かに、人を健やかに、地域と社会を活性化する多彩なスケールの木づかいが生まれていく、という意味を込めています。
デザイナー: 則武 弥

- 「エコプロ2018」における表彰及び広報

最優秀賞等の表彰、及びウッドデザイン賞の受賞作品の展示を「エコプロ2018」(表彰は2018年12月6日、展示は12月6日～8日・東京ビッグサイト)にて行いました。同展では受賞者、審査委員によるプレゼンテーション、交流会なども実施されました。

- 「作品案内ブックレット」の発行

ウッドデザイン賞の入賞作品の概要を収録したブックレットを製作し、受賞者ならびに自治体やメディア、関連業界へ配布しています。受賞作品の広報・PRにお使いいただけます。

- 展示会等での消費者、小売・流通事業者への訴求

各地域で実施される展示会、交流会等で受賞作品の展示及びPRを行います。

- メディア・流通小売との連携企画の推進

メディアや流通小売業と連携して、ウッドデザイン賞の趣旨を伝えるとともに、受賞作品の掲載・露出・PRを行います。



- ウッドデザイン・サポート連絡会 私たちはウッドデザイン賞を応援しています。

全国森林組合連合会
一般社団法人 全国木材組合連合会
一般財団法人 日本木材総合情報センター
一般社団法人 全日本木材市場連盟
公益財団法人 日本住宅・木材技術センター
森を育む紙製飲料容器普及協議会
日本集成材工業協同組合
日本合板工業組合連合会
一般社団法人 日本フローリング工業会
一般社団法人 全国木造住宅機械プレカット協会
日本木材防腐工業組合
公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 日本建材・住宅設備産業協会
一般社団法人 日本木造住宅産業協会
一般社団法人 JBN

一般社団法人 全国中小建築工事業団体連合会
公益社団法人 国際観光施設協会
一般社団法人 日本オフィス家具協会
特定非営利活動法人 芸術と遊び創造協会／東京おもちゃ美術館
一般社団法人 日本インテリアコーディネーター協会
林業復活・地域創生を推進する国民会議
美しい森林づくり全国推進会議
一般社団法人 日本森林学会
一般社団法人 日本木材学会
木材利用システム研究会
一般社団法人 全国LVL協会
全国天然木化粧単板工業協同組合連合会
一般社団法人 木と住まい研究協会
公益財団法人 PHOENIX(木材・合板博物館)
日本複合・防音床材工業会
農林中央金庫

WOOD DESIGN CONCEPT BOOK 2018